

Y7-04

シームレスな医療を目指す地域連携パス「もも脳ネット」

岡山赤十字病院 脳卒中科

○岩永 健¹

もも脳ネットは「地域医療連携が継ぎ目なく円滑に行われ、良質の医療を提供すること」を目的として設立されました。平成18年6月に6施設で始めた会は現在40を超える医療機関が参加するまでに拡大しました。もも脳ネットでは連携の手段として脳卒中と大腿骨頭部骨折のパスを用いているが、おのおの患者用と医療者用の2部構成でできています。患者用パスは患者・家族が全体の流れを知ることができるように急性期から回復期を経て維持期や在宅・施設入所といった診療のつながりをオーバービューパスとして図示しています。医療者用のパスは医師・看護師・PT・OT・ST・薬剤師・栄養士・MSWがそれぞれの診療の内容を記載し次の診療機関にCDRを媒体として送っています。これまで各職種が重複して記載していたことが不要となるばかりでなく、記載内容を統一することで、現場で必要かつ十分な情報を伝えることができます。パスの作成には各職種がワーキンググループを作り、膝を突き合わせて話合うことで、現在も顔の見える関係が続いています。平成21年からパスの集計を行っており、この5年間で1万人を超える患者さんがもも脳ネット連携病院で医療をうけました。その成果とともに現在進めている岡山県内の病院をインターネットで結ぶ晴れやかネットを用いた連携についても報告いたします。

Y7-05

脳卒中地域連携医療 ～熊本型～

熊本赤十字病院 神経内科¹⁾、脳神経外科²⁾

○和田 邦泰¹⁾、松原 宗一郎¹⁾、平原 智雄¹⁾、藤本 健二¹⁾、大田 和貴²⁾、松元 淳²⁾、長谷川 秀²⁾、寺崎 修司¹⁾、三浦 正毅²⁾

熊本の脳卒中地域連携医療は、「地域完結型脳卒中診療」として進化してきており、「熊本型」とも呼ばれている。この熊本型の地域完結型脳卒中診療が成り立ってきた背景と歴史について紹介したい。まず、重要な背景として、回復期から慢性期の脳卒中リハを担う施設が充実していたことがあげられる。また、リハ施設間の連携も積極的に行われ、1995年には「脳血管疾患の障害を考える会」、「回復・維持期リハを考える会」が発足しており、現在の病院間連携の基礎が形成された。一方で、脳卒中急性期治療は、1970年代に赤十字病院、済生会病院を始めとする公的病院に脳神経外科が開設されたことから発展してきた。1990年代初頭には神経内科医も積極的に急性期脳卒中診療に携わるようになり、急性期脳梗塞治療の標準化・効率化を目指した「安静度拡大マニュアル」を作成、「脳梗塞クリティカルパス」に発展する。これにより急性期から回復期・慢性期へ治療とリハの継続性が向上し、急性期病院からリハ病院への転院がスムーズになり、急性期病院の在院日数短縮にもつながっていった。更に脳外科、神経内科、リハ科の垣根のない「火の国脳卒中カンファレンス」が開設され、主に急性期脳卒中を担う病院間、診療科間の連携が強固になっていった。このように、複数の連携体制が混在していた2006年に「地域連携パス」作成の機運が高まり、2007年4月から「脳卒中地域連携パス」が始動。この運用ネットワークとして機能する「熊本脳卒中地域連携ネットワーク (K-stream)」が発足し、既存のネットワークを包括する形となり、発展している途上である。当院脳神経外科、神経内科、リハ科もこのネットワークに積極的に参加している。

要
望
演
題
10
月
16
日
(木)

Y7-06

群馬県における脳卒中地域連携クリニカルパスの運用と課題

前橋赤十字病院 脳神経外科¹⁾、リハビリテーション科²⁾、薬剤部、看護部³⁾、地域医療連携課⁴⁾、医療社会事業課⁵⁾

○朝倉 健¹⁾、大竹 弘哲²⁾、高麗 貴史³⁾、笹原 啓子³⁾、須賀 一夫⁵⁾、中井 正江⁶⁾

【はじめに】群馬県における脳卒中地域連携クリニカルパスの運用状況と今後の課題を報告する。

【これまでの経緯】平成19年に結成した「前橋日赤脳卒中医療連携の会」が関連する11病院とともに作成した脳卒中地域連携クリニカルパスは群馬県内に徐々に広まり、平成23年度に県内共通化された。12の計画管理病院、33のリハビリ病院、221の診療所、18の老健施設、群馬県および郡市医師会、群馬県健康福祉部医務課が参加する「群馬脳卒中医療連携の会」に発展した。「群馬脳卒中医療連携の会」の事務局は前橋赤十字病院にあり、群馬県の脳卒中地域連携パスは、年3回の全体会や施設基準申請も「群馬脳卒中医療連携の会」で統一して行っている点特徴である。全県の連携パスのデータはデータ解析WGによって検討・解析され、平成23、24、25年度の実績は761名、858名、873名であった。【パス改訂作業】平成21年度にバリエーションシート、平成22年度にオーバービュー、看護師の記載する連携シート、同意書を改訂してきた。平成25年度は医師・看護師・薬剤師・リハビリ技師・MSW・連携事務各職種からなる新たなパス改訂 working group を結成し、医療者用オーバービュー、連携シート、リハビリ報告書、バリエーションシートをより使いやすくなるよう改訂した。また持参薬を含めた現在使用中の薬剤情報を確実に伝達するため、「薬剤シート」を新設した。ゆるキャラグランプリ3位のぐんまちゃんを前面に出し、群馬の風景画やコラムを入れて読みやすくした「ぐんまちゃんの脳卒中ノート」を作成した。

【今後の課題】施設間のパス電子化はコストとセキュリティのハードルが高く、実現に至っていない。維持期との連携はまだ十分とは言えない。

Y9-01

「当院における整形外科の人材育成」

熊本赤十字病院 整形外科¹⁾、国際医療救済部整形外科²⁾、救急部整形外科³⁾

○中島 伸一¹⁾、佐久間 克彦¹⁾、本多 一宏¹⁾、宮本 和彦¹⁾、岡田 二郎¹⁾、林田 洋一¹⁾、岡村 直樹²⁾、細川 浩²⁾、城下 卓也²⁾、岡野 博史³⁾

【はじめに】当院整形外科では、知識・見識・診療能力ともに優れた整形外科専門医の育成と整形外科以外の医師にも整形外科の診療能力を習得させる人材育成を目指している。

【背景】平成10年の新病院オープンに伴い、整形外科の患者数が増加し、医師の充足が必要となった。しかし、当県内には大学病院が一つしかなく、大学医局の入局者数によって派遣医師数が左右されるという実情があった。そこで、大学人事に左右されない人材育成を検討した。

【対策】まず始めに、当院で整形外科以外に在籍している整形外科医の知識向上を図った。次に、国内各地から集まったどの医局にも属さない医師が、診療科の枠を越え豊富な症例を経験できる体制を整え、整形外科の診療能力も兼ね備えた総合医として育てることとした。そして、キャリアアップの一環として整形外科専門医を目指す道を提示してきた。さらに、院外研修や国内外留学、災害時の救護活動や国際救済事業などにも積極的に参加させ、個々のスキルアップを図りながら、国内外の専門医との人脈形成にも力を入れた。

【今後】整形外科専門医だけでなく、麻酔科、内科、救急など整形外科以外の専門医等資格を有し、総合医として幅広い診療能力を持つ整形外科医を育成したいと考えている。また、現在検討中である新専門医制度導入への対応も引き続き行っていく予定である。そして、将来的には赤十字グループ間で積極的に人事交流や情報交換ができる基盤を作り、当院のみならず赤十字病院全体でスペシャリティを目指す整形外科医の育成を行っていきたくと考えている。